

## Chapter 01:プロローグ

大竹が勤務する会社は、レトルト商品からスナック菓子、清涼飲料水まで食品全般を市場に出している大手食品メーカー。しかし、ここ数年はヒット商品に恵まれず売上が低迷している。この状況を打破しろとの社命が全社員へ通達され、大竹が所属する開発部門では緊急会議が執り行われた。

会議の後、大竹は一人、カフェで肩を落としていた。



売上低迷を打破しろなんて言われても……。すぐに売れる商品が生まれたら苦労はしないよなあ……。

大竹はPCの画面を見ながら独りごとを口にしていた。



すみません、新聞が落ちていますよ。

大竹の鞆から新聞が落ちていた。隣のテーブルに座っていた福山が新聞を拾い上げると、「食品フード新聞」というタイトルが目についた。



ああ、気がつきませんでした。ありがとうございます。



失礼ですが、食品業界の方ですか？  
食品フード新聞なんてあまり見かけないものですから。



ええ。メーカーで商品開発に携わっています。



それはやり甲斐のあるお仕事ですね。



まあ……確かにやり甲斐はあるのですが……。実は今、いろいろと大変でして。



というと、何か悩み事でも？



実は、恥ずかしながら私の会社は売上が低迷気味で……。何とかヒット商品を生み出せと毎日言われ続けて日々頭を悩ませています。



それは大変ですね。  
確かに、今の日本はデフレが20年も続き、なかなかヒット商品が出ない世の中になりましたからね。



本当におっしゃる通りです……。私の部署でも毎年100を超える商品を世に出していますが、1年後に残る商品はたったの3つ程度です。



最近は少し売れてもすぐに類似商品が出てきますから、ロングラン商品にはなりにくい状況ですね。



お詳しいですね。  
事実そうなんです……。



差し支えなければ教えていただきたいのですが、商品開発の過程では、当然リサーチなどをしておられますね？